

「あなたが必要です」「はいよろこんで」

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 小児外科 都築 行広

真面目な公務員だった父の教育は、「あなたは優れた人間だから、人を助けなさい」というもので、自分が努力するほど人の助けになる構図に惹かれた僕は、医師を目指しました。

“Surgeons know nothing but do everything. Internists know everything but do nothing.” 学生の僕にはこの言葉が妙に刺さり、何でも知っている外科医が一番すごいと理解しました。命を救う外科医に惹かれ、第1外科の教室に入り浸り、学会参加やAucklandへの留学を経て、心臓外科医になろうと考えた折、救急実習で心肺停止の乳児が搬送となりました。乳幼児突然死症候群でした。慟哭という言葉が霞むほど、母は取り乱し、泣き叫ぶ姿を目の当たりにし、「ああ、子どもって死んではいけないのだな」と感じ、自分が努力することで一人でも助けられないかと、小児外科の道を選びました。沖縄県立中部病院での研修中、同期がNEJMに論文をのせるなか、僕がなんとか学べたことは、「ベッドサイドに行くこと」「手を抜かないこと」「思考を止めないこと」でした。

外科医としてのキャリアを積み、上級医なしで開胸心マができるようになった卒後6年目で、神奈川県立こども医療センターでの研修機会をいただきました。豊富な症例、卓越した知識・技術をもつ上級医から受ける指導は夢のような経験でしたが、人材の豊富な施設にいると、ふとした瞬間に、自分がいなくても他の誰かが(何ならもっと上手に)手術をやってくれるな、と感じることがありました。折しも、周産期医療が活発で、小児外科医の不足が叫ばれて久しい沖縄から声がかかりました。求められる場所で働くことへの期待と、忙しい毎日で家庭に負担がかかるのではとの不安がありましたが、妻に相談すると、「沖縄の子どもたちを助けてあげて。でも、絶対に仕事だけにはならないで、空いた時間は子どもと遊んでね」と釘を刺しつつ背中を押してくれました。

小児外科医として一人前になったのち、沖縄に戻ってきました。ほぼ毎日がオンコールで、外科的疾患をもつ児の出産が待機している場合は、先生は沖縄本島から出ないでね、と言われることもあります。一般的には避けられる勤務形態なのかもしれません、僕は、周囲から頼りにされ、信頼のおける仲間と、地域の周産期小児医療を守るミッションを担うことに、誇りと心地よさを感じます。努力して人の助けになる、という僕の原点に合う働き方で、必要とされることで力が發揮できることを実感します。

一通りの新生児手術は遂行できる一方、低出生体重児の術後管理はお手上げで、何でもできるけど何も知らない外科医に日々近づいていると感じますが、何でも知っている新生児科・小児科の先生が隣にいるため不足はありません。医学生の僕へ、できないことは分け合えるので、得意を伸ばせばよいと伝えたいです。学位なし、医師としての留学経験なしでも、臨床で研鑽をつみ、地域の医療へ貢献するというキャリアがあってよいと考えます。週の半分は定時に家に帰り、子どものクモンの丸付けをして夕食後の皿洗いをする、週末は【僕の休みく奥さんの休み】を意識して子どもを連れ出すことで、家事・子育てへの参加はできていると感じます(妻の合格点には遠いです)。家庭でも、父の役割を果たせるのは僕しかいません、ミッション遂行には「家族の隣にいること、手を抜かないこと、思考を止めないこと」が重要です。

[著者略歴] **都築 行広** (つづき ゆきひろ)

愛知県出身

2014年 岐阜大学 卒業

2014年 沖縄県立中部病院 研修医

2018年 沖縄県立北部病院 外科スタッフ

2019年 神奈川県立こども医療センター 小児外科フェロー

2022年 沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 小児外科スタッフ

外科専門医、小児外科専門医、周産期・新生児医学会認定外科医、小児がん認定外科医

～DEI 推進委員会より～

自分らしいウェルビーイングな働き方を模索して

医師という職業の中でも、働き方は実に多様です。周りと同じでなければ、という思い込みを手放し、自分に合った形で能力を発揮することが、生きがいやウェルビーイングにつながるのだと感じます。「患者や家族の隣にいること、手を抜かないこと、思考を止めないこと」という言葉には、医師として、人としての誠実さと利他の精神が凝縮されており、地域の最前線で小児外科医としてのミッションを果たしながら、家庭の役割も大切にされる筆者の姿勢に、深い敬意を抱きます。

私たちはしばしば、無意識のうちに「こうあるべき」という価値観やアンコンシャスバイアスに縛られ、自らの選択を狭めてしまいます。しかし、本エッセイのように、他者への貢献と自身の幸福を両立させる生き方は、多様なキャリアのあり方を示す希望でもあります。誰もが自分らしく力を発揮し、安心して働ける環境を広げていきたいものです。

責任編集
DEI 推進委員会